

4

問1 18世紀にヨーロッパとアメリカで行われた戦争について

|   |  |
|---|--|
| ア | アメリカ独立戦争におけるロシアの立ち位置<br>→ エカチェリーナ2世が[1. <u>武装中立同盟</u> ]  |
| イ | スペイン継承戦争(1701~1713)におけるイギリスの獲得領土<br>→ イギリスは[2. <u>ユトレヒト条約</u> ]<br>・仏⇒英: [3. <u>アカディア</u> 、 <u>ニューファンドランド</u> 、 <u>ハドソン湾沿岸</u> ]<br>・西⇒英: [4. <u>ジブラルタル</u> 、 <u>ミノルカ島</u> ] |
| ウ | オーストリア継承戦争(1740~48)におけるプロイセンの獲得領土<br>→ 奥のマリア=テレジアの即位に反して仏・普・西が戦争 → [5. <u>アーヘン和約</u> ]で講和。<br>①普は奥から[6. <u>シュレジエン</u> ]を獲得!<br>②各国はプラグマティック=ザンクティオンを確認し、マリア=テレジアの即位を承認する。    |
| エ | 北方戦争(1701~21)でロシア皇帝[7. <u>ピョートル1世</u> ]はスウェーデン王カール12世に勝利。<br>→ポルタヴァの戦いで勝利し、ニスタット条約で[8. <u>エストニア</u> ]を獲得。バルト海に進出する。<br>→北方戦争中、西洋への窓口となる[9. <u>サンクト=ペテルブルク</u> ]を建設。          |

問2 【図版】プロイセンのフリードリヒ2世のサン=スーシ宮殿の建築様式

→ 18世紀、ベルリン近郊のポツダムに造られた、繊細・優雅な[10. ロココ式]

※宮殿建築についてはパリ近郊のヴェルサイユ宮殿の[11. バロック式]もチェック!

問3 露清国境条約 → 康熙帝とピョートル1世は[12. ネルチンスク条約]

<露清間国境条約>

|            |      |   |
|------------|------|---|
| ネルチンスク条約   | 1689 | 康熙帝ピョートル1世(13. <u>スタノヴォイ山脈</u> と <u>アルグン川</u> )                         |
| キャフタ条約     | 1727 | 雍正帝(モンゴル北辺の国境)。交易場の設置も決定。   |
| 14. アイグン条約 | 1858 | 東シベリア総督[15. <u>ムラヴィヨフ</u> ]。清の苦境に乗じて<br>[16. <u>アムール川</u> ]以北を獲得。       |
| 17. 北京条約   | 1860 | アロー戦争講和斡旋の代償として[18. <u>沿海州</u> ]を獲得。<br>[19. <u>ウラジオトク港</u> ]。          |
| 20. イリ条約   | 1881 | 東トルキスタンの混乱に乗じてロシアが獲得したイリ地方返還。トルキスタンの国境を画定。ロシアの[21. <u>アレクサンドル2世</u> ]締結 |

問4 エカチェリーナ2世のポーランド分割に対して蜂起した軍人は[22. コシュージコ]

※ ハンガリーの民族運動は[23. コシュート]なので注意!

**コシュージコ (1746~1817)**  
(コシチューシコ)

リトアニア貴族出身のコシュージコは、アメリカ独立戦争で義勇兵として活躍し、帰国後ポーランド軍司令官に就任した。列強の祖国分割に反対し、1794年に農民兵を含む部隊を率いてロシアと戦ったが敗北。1795年の第3回ポーランド分割でポーランド王国は消滅した。(P175)



**コシュート — ハンガリーの英雄 —**

小貴族出身の政治家で、急進的独立派。1848年の二月革命、三月革命の影響を受けて、ハンガリーでもオーストリアの支配に対して独立運動が高まった。1849年ハンガリー共和国独立宣言がされると、執政として革命を推進した。しかし、ハンガリー内の少数民族の独立は認めない大マジャール主義をとったので、周辺諸民族の反発を招き、オーストリア軍に敗れた。敗北後亡命し、ヨーロッパ各国を回った後、イタリアで亡くなった。アウスグライヒ体制には反対であった。

ハンガリー民族運動(1848年)



コシュート (1802~94)

問5 産業革命期のイギリス社会

ア 自由主義経済学

- ・『諸国民の富』の著者は[24. アダム＝スミス]。重商主義を批判し、国会による経済活動への干渉を排除すべきだと唱えた。「経済学の父」。

※ケネーはフランスの経済学者。「重農主義の祖」。『25. 経済表』を著したほか『百科全書』の執筆にも携わった。

イ 労働力の創出

- ・[26. 農業革命]により三圃性から[27. 四輪作法]に転換し、第二次囲い込みを行って大規模な農地を作り、資本主義的農業経営が行われるようになった。多くの農民が土地を失い、都市に流入した結果、[28. 低賃金労働者]となった。安価な労働力の出現は産業革命進展の要因の一つとなった。

|     | 時代       | 目的        | 主体             | 規模  | 影響                                |
|-----|----------|-----------|----------------|-----|-----------------------------------|
| 第1次 | 15C-17C半 | 29.<br>牧羊 | ジェントリ<br>(非合法) | 小規模 | [30. <u>毛織物</u> ]工業発展<br>ジェントリ台頭  |
| 第2次 | 18-19C   | 31.<br>穀物 | 議会立法<br>(合法)   | 大規模 | 離農者が都市に流入<br>[32. <u>労働力の創出</u> ] |

ウ ラダイト運動

- ・機械の発明により手工業者の職が失われたとして[33. 機械打ちこわし運動]が起こった。

エ 産業革命期諸都市

- ・[34. マンチェスター]…木綿工業で繁栄。
- ・[35. リヴァプール]…マンチェスターで生産した綿製品の輸出港として大商業都市となる。
- ・[36. バーミンガム]…製鉄業・機械工業で栄える。

問6 対仏大同盟 (第3回以降は学説によってカウント数が分かれる。)

| 対仏大同盟 | 結成の動機          | 経過                                | 解消             |
|-------|----------------|-----------------------------------|----------------|
| 第1回   | 37.<br>ルイ16世処刑 | ナポレオンのイタリア遠征で瓦解する                 | カンポ＝フォルミの和約    |
| 第2回   | 38.<br>エジプト遠征  | アルプス越えやマレンゴの戦い後、仏軍優位により瓦解         | 39.<br>アミアンの和約 |
| 第3回   | 皇帝即位           | [40. <u>アウステルリッツ</u> ]の三帝会戦で敗北し瓦解 | プレスブルク条約       |

問7 オランダのベルギー喪失


☆ウィーン会議とオランダ

- ・喪失：ケープ植民地、セイロン島
- ・獲得：[41. 南ネーデルラント](→1830年[42. 七月革命]の影響で[43. ベルギー]として独立)

七月革命…ブルボン朝復古王政の反動政治に不満が募り、オルレアン家のルイ＝ウィリップを擁立して七月王政を開始！

☆ベルギーの歴史

- ・1555年まで [44. カール5世]のハプスブルク帝国が領有
- ・1556年 カール5世が退位して[45. スペイン]=ハプスブルク家領となり[46. フェリペ2世]が領有。フェリペ2世はカトリック政策を展開。新教徒が多いネーデルラントは不満が蓄積。
- ・1568 [47. オランダ独立戦争]→北部はユトレヒト同盟を結んで独立達成するが、南部は脱落
- ・1701～1713 スペイン継承戦争→西がブルボン家になったので南ネーデルラントは[48. ラシュタット条約]で奥へ
- ・1815 ウィーン会議→奥は蘭に南ネーデルラントを割譲、ロンバルディアとヴェネチアを獲得(→リッパントの要因)



ナポレオン 3 世


1867 ↓ フランス領インドシナ連邦 (タヒチ島)

## ナポレオン 3 世の第二帝政

### ● ナポレオン 3 世の評価

**● 解説** ナポレオン 3 世(ルイ=ナポレオン)は、対英協調外交や保守的農民に依拠する独裁権力とする見方などから、従来「取るに足らない人物」とされてきた。しかし近年では、優れた時代感覚により民衆の圧倒的的支持を受け、フランスの「産業的・市民的栄光」を実現した人物として評価が高まっている。

**● 大ナポレオンと小ナポレオン** イギリスで出された風刺画。カエルに例えられた小ナポレオン(ナポレオン 3 世)は伯父に比べて過小評価されていた。(着色)



### ● ボナパルティズム

政策支持

皇帝ナポレオン 3 世

- 行政・軍事・外交の全権集中
- 法案提出権(議会は審議権のみ)

|           |       |           |                     |    |
|-----------|-------|-----------|---------------------|----|
| 産業育成・海外侵略 | 対立・均衡 | 土地所有権の保護  | 大ナポレオン(ナポレオン 1 世)崇拜 | 保護 |
| ↑         | ↑     | ↑         | ↑                   | ↑  |
| ↓         | ↓     | ↓         | ↓                   | ↓  |
| 資本家階級     | 労働者階級 | 農民人口の 3/4 | カトリック教会             |    |

ナポレオン 3 世の権力基盤は、**相対立する国民各層の支持を巧妙に取り付ける**伯父ナポレオン 1 世譲りのボナパルティズムにあった。彼は、外交面で典型的な海外膨張政策をとるとともに、内政面では「馬上のサン=シモン(●P193E)」と呼ばれるように、パリ市改造など斬新な社会政策を実施。フランスの資本主義を確立した。

☆誤答選択肢 (ウ)

- ・社会主義者鎮圧法はプロイセン。[49. ヴィルヘルム 1 世]とビスマルクの時代。労働者の扱いについては弾圧の一方で[50. 社会保険制度]を成立させ「飴と鞭」の政策を行った。

☆第二帝政開始

○1851 年のクーデタ

- ・議会内で王党派が多数を占めたのに対抗して[51. ルイ=ナポレオン]のクーデタ。議会を解散し、大統領の任期を 10 年に延長

○1852 年 [52. 第二帝政]の成立 ⇒ 国民投票で皇帝に就任。ナポレオン三世となる。

☆ナポレオン三世の対外戦争

- ・1853~1856 : [53. クリミア戦争]…聖地管理権問題。ロシアを英仏サルデーニャで破る。
- ・1856~1860 : [54. アロー戦争]…イギリスと共に中国清王朝を侵略。
- ・1858~1867 : [55. インドシナ出兵]…阮朝ヴェトナムを侵略。仏領インドシナの起源。
- ・1859 : [56. イタリア統一戦争]…サルデーニャの対奥戦争支援の見返りにサヴォイア・ニースを獲得。
- ・1861~67 : [57. メキシコ出兵]…奥皇帝の弟マクシミアンをメキシコ皇帝に立てるも見捨てて撤兵。
- ・1870 : [58. 普仏戦争] : スペイン王位継承問題でビスマルクが電報を改ざんして戦争熱をあおり開戦⇒ナポレオン 3 世は[59. スダン]で捕虜となり失脚。

問9 リソルジメント



○リソルジメントはイタリア統一運動。1861年の統一後もオーストリア領ヴェネツィアとローマ教皇領が残存していた。イタリアはプロシヤの対外戦争に乗じて両者を回収。

- ・ [60. 普墺戦争] でオーストリア領ヴェネツィアを回収
- ・ [61. 普仏戦争] で教皇領を回収。

○ [62. 南チロル と トリエステ] は「未回収のイタリア」。WWIにおいてイタリアがロンドン密約で連合国として参戦する要因となる。

問10 アレクサンドル2世の業績

○クリミア戦争中に即位した [63. アレクサンドル2世] は敗戦後にロシアの後進性を痛感し近代化に着手。→1861年に [64. 農奴解放令]

※土地緊縛から解放された農民が都市に流入し工業化を支える [65. 低賃金労働者] になる。

|           |      |  |  |
|-----------|------|--|--|
| アレクサンドル2世 | 1855 | 1861 農奴解放令   | 1858 アイグン(愛琿)条約 (○P.216 1年)  |
|           |      | 1863 ポーランドの反乱<br>(皇帝の改革に乗じた農奴の蜂起)                                    | 1860 北京条約 (○P.217 表)   |
|           |      | ○アレクサンドル2世の反動化   |  |
|           |      | 1872 『資本論』(○P.193コ)のロシア語訳  |  |
|           |      | 1874 ナロードニキ運動が最も高まる<br>主体: 学生・知識人(インテリゲンツィヤ)<br>標語: 「ヴ=ナロード(人民のなかへ)」 | 1867 アラスカ売却  |
|           |      | 弾圧→挫折←農民の無関心<br>一部——分散   | 1860年代~70年代 ウズベク系3ハン国の<br>征服<br>(ブハラ=ハン国・ヒヴァ=ハン国)<br>の保護国化<br>コーカンド=ハン国の併合 |
|           |      | ニヒリズム(虚無主義)<br>(1860年代~)   | 1875 樺太・千島交換条約   |
|           |      | アナーキズム(無政府主義)<br>(1840年代~)   | 1877 ロシア=トルコ(露土)戦争 (~78)<br>3回目の南下政策                                       |
|           |      | テロリズム(暴力主義)の台頭   |  |
|           |      | 1881 アレクサンドル2世の暗殺  | 1881 イリ条約 (○P.216 1年)  |